り、又ひぢにあてねば、六七寸のほどよりながきかたを、くしのはこのふたの二方にひきあつることも有べし、うちの御もとゞりとることも、おなじことなり、ふさのゆひやうかはるなり、ふさをふたつにわけて、こもとゆひふたつして、べち〳〵にふたつにゆふなり、そのゆひやうは、うらうへながら、かたかぎにゆふなり、そのかぎのてをひだりみぎにむすべば、ひだりのは、めのこむすびにせよ、それがよきなり、もとゞりをとることは、ならふによるまじ、てんせいのてきゝによるべし、

〔連阿不足口傳抄〕一髻取次第（スルスツケ捻紙三五七九之間凡半ナルベシ）

〔法體裝束抄〕一兒のかみのゆひやうの事

もとゆひうすやう、又はくたんしなり、もとゆひの左をあげてみじかく、右をさげてながくする也、もとゆひ左はうつむき、右はあをのく也、さてかみのすそは左のわきへとるなり、かみのしなによりて、中をかみひねりにて、一所二所ゆふなり、髮のゆひやうは、をしのはがたつねのごとし、宮など御童體の時、かやうにゆひたてまつるなり、

〔源平盛衰記三十一〕維盛惜妻子遺事

此北方（平維盛妻）ト申ハ、故中御門大納言成親卿ノ御女也、（中略）乳母子ニ兵衞佐ト云女房一人ゾ免レテ候ケル、是ニ付テモ世ノ憂キ事ヲ思ツヾケ給ケルニヤ、イツモ引カヅキ、泣ヨリ外ノ事ゾナキ、サテモ或時鬢ヲヒロゲテ何トヤラン書付テ、又如元ニ引結捨給ヘリ、兵衞佐是ヲ取テヒラキ見ニ、一首ノ歌也、

結ビテシ心ノ深キモトユヒニ契シスエノホドケモヤセン、ト書スサミ給ヘリ、

〔好色一代男二〕女は思はくの外

小鹽山の名木も、落花狼藉、今一入と惜まるゝ、げんぼうといふ男達、其比は捕手居合はやりて、世